

ドイツにおける日本語学習者の学習動機 —大学生を対象としたナラティブ・インタビューに見る—

田村 知佳

1. はじめに

ドイツで行われている日本語教育について、国際交流基金が公表している「国別日本語教育事情」を参照してみると、1980年代から日本語学習者が増え始め、1990年代からは日本のマンガなどのポップカルチャーが流行することで若者の学習者が急増してきたことがわかる。また、ゲーネンツ(2001)の統計によると、1990年から2000年にかけて日本語学習者数は1.6倍にもなり、その時点で1.5万人いると推定している。

そこで、本発表ではこのような状況の中でドイツの日本語学習者が「どのような動機の要因から日本語の学習に駆り立てられたのか」、また「学習動機またはその要因は時間や経験とともにどのように変動してきたのか」に焦点をあてる。

2. 研究の背景

本研究では、Schunk, Pintrich & Meece (2008)の学習動機の定義に基づき、学習動機とは学習者が目標が設定された行為に取り組み、またその取り組みが持続するプロセスとする。この中でも、動機とは学習者の言動などから解釈することができるもの、また目標は時間の経過や学習者の経験によって変動や具体化していく性質をもつことに注目している。

この観点を取り入れた研究として、Ushioda (2001)で行われた *effective motivational thinking* の調査がある。Ushioda は、大学生を対象に学習者が自ら学習動機を高めたり維持するために、どのように過去の経験や目標を解釈しているのかインタビュー調査を行った。その結果、大学1年生の段階では、言語学習に関連する過去のポジティブな経験や言語学習そのものを楽しむことを中心とする傾向と、将来の職業など具体的な目標を中心に語る二つの傾向が見出された。また前者の場合、時間の経過により後者の傾向に移行することが1年後のフォローアッ

プ・インタビューで確認されている。この結果をもとに、本研究では過去の経験や学習行動そのものに興味を持つ傾向を「内在的目標」、将来の具体的な目標などを「外在的目標」とする。その上で、ドイツの大学生の学習動機を日本語学習の観点から分析を行っていく。

3. 調査方法

本研究では、調査方法として Flick (2000, 2002)で提唱されている *Episodic Interviewing* を用いた。これは、個々人の日常生活の中でどのように特定の物事に関連する経験をし、そこから意味づけを行っているかを調査するインタビュー方法である。

本調査はドイツのある大学に設置されている東アジア学部にて、1年生3名を対象に行った。インタビューを行うにあたり、まず韓国学専攻のための韓国語初級のクラスにて学習者として1年間の参与観察を行った。その上で、2学期目の学期末試験終了後にあたる2006年7月から8月にかけてドイツ語で調査協力者3名に本調査を行った。インタビューでは、次の質問をひとつの手がかりとして用いた。なお、これらの質問は事前にインタビュー方法のコンセプトとともに調査協力者に伝え、話す内容をあらかじめ考えてから本調査を行った。

Q1 外国語教育に関して、学校教育を含め大学に入るまでどのような経験をしてきたか。そして、その中でどのように東アジア言語を専攻言語にするに至ったのか。

Q2 なぜ他のヨーロッパ言語ではなく、東アジア言語に関心を持ったのか。

Q3 大学で専攻言語の勉強を始めてから、どのようにこれらの言語を学習することに対する見方が変動したか。

Q4 今専攻している言語を使って、将来どのよう

な事をしたいと考えているか。

なお、調査協力者の背景は次の表のようになっている。

表 調査協力者の背景

	Patrick (20代前半)	Nicole (20代前半)	Felix (20代後半)
背景	ドイツ人	ドイツ人	ドイツ人/韓国人
専攻言語	日本語、韓国語	中国語、韓国語	韓国語、中国語
これまで学んできた言語 ¹	英語、ラテン語、日本語、韓国語	ロシア語、英語、イタリア語、日本語、中国語	韓国語、英語、ラテン語、中国語

4. 調査結果の分析

4.1 ストーリー分析(Patrickの例)

本研究では、インタビュー調査で語られた内容をコード化し、それらをあらかじめ設定しておいた「時間」、「場所」、「言語」のカテゴリに分類することで分析を行った。その上で、インタビューの内容を忠実に再構築したものをストーリーとして、内容に関連する社会的背景を補足しながら分析結果を紹介する。なお、本研究ではひとりの学習者のストーリーをより詳しく扱うために、日本語学習歴が最も長い Patrick のみを取り上げ、また大学で専攻を始めるまでを対象とする。

4.1.1 学校での外国語教育

ドイツの学校教育では、中等教育段階が始まる第5学年から第一外国語が必須であり、地方によって例外はあるがほとんどの場合英語が教えられる。また、Patrick が中等教育段階で通学したギムナジウムという学校では第二外国語が第7学年から必須である。第二外国語としては、フランス語、ラテン語やスペイン語が最も多く提供され、生徒は複数の言語からひとつを選択する。

【ストーリー】

Patrick は、6歳ごろからパソコンゲームを通じ英語に触れていた。その頃のゲームはまだドイツ語に訳されたものは少なく、ほとんどが英語だった。そのため、学校で英語の授業が導入されても、それは彼にとって比較的簡単なものだった。また、英語が

導入された第5学年ごろから漠然と「色々な言語を学び、世界中の人と分かり合えるようになりたい」(P/89-97)²と考えるようになる。そのことで、外国語学習そのものに興味を持つようになった。

第7学年からは第二外国語としてフランス語とラテン語の選択肢から彼はラテン語を選択する。その理由としては、「フランスはドイツに近すぎるから興味を持てなかった」(P/121-127)と説明した。ラテン語の授業は、Patrick にとって一から勉強しなければならなかったため、英語より難しく感じたが、おもしろくもあった。その主な理由として、「英語は早くから将来絶対に必要になってくる」(P/61-65)ことを意識したことを挙げている。また、ドイツ人にとって古典語にあたるラテン語を勉強することで、「ドイツの文化的背景や常識的な知識が成り立った歴史などを発見したことがもっとも楽しかった」(P/51-57)と語っている。これをきっかけに、言語学習において常に言語の背景にある文化や歴史に興味を抱くようになる。

4.1.2 日本語学習

冒頭でも説明したように、ドイツでも他の欧米諸国と同様に日本のポップカルチャーが流行し、これもドイツにおける日本語学習の大きな要因となっている。マンガなどのポップカルチャーには、日本の社会的背景にも大きく関わっているものも多いため、これらは簡単あるいは無意識的にも日本語や日本事情に触れられるメディアとなっている。

【ストーリー】

趣味でゲームを続けていた Patrick は次第にテレビゲームにも興味を持つようになり、さらにそのゲームが作成された文化的背景にも関心を抱くようになる。そこで出会ったのが彼にとってまったく未知な日本文化であり、彼は馴染みのあるヨーロッパ文化とは全く異なる考え方に基づく文化が存在することに驚かされた。もともと異文化に惹かれていた Patrick は、この経験をきっかけに日本人やその文化についてドイツのメディアを通してではなく、自分の手で知りたいと思うようになる。そして、日本語を日本について知るための橋渡しとし、友人と日本語コースに通った。授業でひらがなとカタカナを一通り勉強し、「読めるようになることで文字の繊細さに感激した。また、英語などよりも日本語がわ

かる人は少ない」(P/290-294)ことや、「このような文字を勉強することで、文章を理解できるようになり、学習成果を実感できることが嬉しかった」(P/306-318)としている。この経験をもとに、Patrick は大学でも日本語を専攻言語とすることを決意した。

大学では、ダブルメジャー制度をとっていたため、もうひとつの専攻として韓国語を選択した。その理由は、「親友が日本語と中国語を選択したから、同じものを専攻したくなかった」(P/150-152)と説明している。日本語学習全般についても「漢字を勉強することがもっとも楽しい」(P/230)とし、「日本語のマンガやゲームを見て、学習成果を実感できるから」(P/238-248)と理由づけている。

このように、Patrick のストーリーを見てみると、学校でラテン語を学習した時に発見した文化的背景への興味からゲームの背景にも関心をもち、日本語学習へと導かれていることがわかる。つまり Patrick の中にはラテン語学習経験と日本語学習は関連づけられていたといえよう。また、同様の特徴はもうひとりの Nicole にも見られた。彼女の場合はロシア語学習経験からキリル文字に興味を抱き、そこからアルファベット以外の文字に惹かれるようになった。これらの傾向から、一見関連性のないように見られる言語学習体験においても、学習動機の要因に関しては学習者の内面で関連づけられていることがわかる。

また、Patrick のストーリーでは学習動機はエキゾチックな言語として日本語そのものに興味をもつことを中心に語られ、目標言語を使用する具体的な目標はあまり重点が置かれていない。ドイツの大学で日本語学習動機のアンケート調査を行った真嶋他(2004)では、日本語学習の魅力として「エキゾチック」さと「漢字」を挙げた学習者が最も多かった。この結果は、本研究の調査協力者のような例はドイツでは少数派ではないことを裏付けている。

4.2 エキゾチックな言語としての日本語

それでは、エキゾチックな言語として日本語あるいは他の言語に興味をもったのなら、なぜそれ以外の言語ではなかったのか。本研究では、日本語の他韓国語、中国語も視野に入れたため、その理由が明らかになった。

Nicole の場合 (日本語→韓国語→中国語)

彼女が中国語を選択した理由については次のように語られていた。

「最初はマンガに惹かれて日本語を勉強しようと思った。しかし、文字が難しすぎた。」(N/130)「そう考えていると、韓国語の方が簡単そうだった。」(N/148)「韓国語は偶然観た韓国映画に出てきたハングル文字を見て興味をもった。しかし、韓国語の初級コースがなくて、そこで開講されていた中国語にしようと思った。」(N/125-128)

また、Patrick に関しても前節で取り上げたストーリーにあったように、友人が中国語を専攻するため、それを避けて韓国語を選択している。この傾向から、エキゾチックな言語として日本語、韓国語、中国語に惹かれてはいるもののこれらの言語の違いはあまり意識されていないことが分かる。つまり、Patrick と Nicole に至ってはどの言語を学ぶかではなく、エキゾチックな言語を学ぶことに重点が置かれていた。

4.3 将来の目標はどの程度意識されていたか

それでは、本研究の調査協力者は「エキゾチックな言語」を学ぶことのみで惹かれて日本語、韓国語、中国語学習を始めたのだろうか。この点に関しては、すでに一度社会人を経験している Felix が次のように明確に語った。

「自分は10年後とかに韓国語が出来る人が必要になるだろうと考えて韓国語を始めたんじゃない。(省略)自分はいつも『よし、これは楽しいぞ』と思ったものをやってきて、そしていつも成果があった。こう考える方がいいんだ。」(F1/110-114)

Patrick と Nicole に至っても、Felix のように明確に言及はしなかったが、将来の職業などを意識してはいるが、それ以上に言語を学習する行動そのものが自分にとってエンジョイできるものかどうかを重要視されていた。

この傾向を台湾の日本語学習者の動機を対象に研究した羅(2005)や同じく韓国の日本語学習者を対象とした朴(2007)と比較してみると、まったく異なる特徴であることがわかる。羅(2005)では、自分を周辺環境や将来像に結びつけることが動機にとって重要な要因であることが明らかになっていた。また、

朴(2007)では、将来の職業に有利であることや英語に対する苦手感から全く異なる言語である日本語の学習に駆り立てられる傾向が見出されていた。これらの特徴を Ushioda(2001)の学習者のタイプに当てはめてみると、台湾、韓国の日本語学習者は「外在的目標」に、ドイツの学生は「内在的目標」に重点を置いて動機を語っていることがわかった。今回の調査協力者は日本語、韓国語、中国語学習者であったが、これらの言語の違いが意識されていなかったため、日本語に限定しても同様のことがいえるだろう。

5. まとめ

本研究の調査から、今回とりあげたドイツの日本語、韓国語、中国語を学習している大学1年生に関しては、学習に関連する動機は一見これらの言語とは関連のなさなような言語を学んだ過去の体験と学習者の中で関連づけられていることが明らかになった。また、それをひとつの内在的目標とし、「学習行動に対するエンジョイ」として「将来の職業」よりも強く意識され、日本語学習に駆り立てられている要因でもあることがわかった。ここから、ドイツにおける日本語学習者の動機を分析するにあたり、「学習行為に対するエンジョイ」もひとつの重要な観点として取り入れる必要があることがわかる。これらの特徴は、質的調査方法として Episodic Interviewing を用い、学習者の言語学習体験全体を視野に入れた調査を行うことで初めて明らかになった。

最後に、今回行った調査では、調査協力者が3名のみだったため、ドイツの日本語学習全般に対しこれらの特徴を一般化することは難しい。しかし、これを共通点のひとつとすることは可能ではないか。また、本研究で行った調査は、大学1年生を対象としたため、内在的な目標がこの後どのように変動していくかを見ることは不可能だった。今後の展開として、すでにある程度日本語を学習してきた大学生として、日本語に滞在しているドイツの留学生を対象に調査を行う。その上で長期的な動機やその要因

の変動を「学習行動に対するエンジョイ」をひとつの観点とした上で分析を行っていく。また、日本語を専攻言語としていない留学生も対象に入れることで、ドイツの学生の中でも外在的な目標に重点を置くケースについて分析を加えていく。

注

1. 言語の順序は、インタビューの中で語られた言語を時系列で並び替えた順序をさす。
2. 括弧の中はインタビューデータを書き起こした中で、発言があった箇所を示す。

主要参考文献一覧

- ゲーネツ、カイ (2001) 「日本語ブームから20年—ドイツにおける日本語教育の現状と問題点—」『世界の日本語教育<日本語教育事情報告編>』6, 73-88.
- 朴世稀 (2007) 「日本語学習者の社会文化的要因と動機付けについて—韓国入学者とのインタビュー内容を中心に—」『間谷論集』1, 49-79.
- 真嶋潤子・小山洋子・飯島昭治・藤田香織 (2004) 「ドイツの大学における日本語学習者—3大学での調査より—」『Ex Oriente』10, 289-312.
- 松尾馨 (2005) 「2.3 ドイツ Germnay」ヨーロッパ日本語教師会(編)『ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of References for Languages』国際交流基金 107-130.
- 羅曉勤 (2005) 「ライフストーリー・インタビューによる外国語学習動機に関する一考察—台湾における日本語学習者を対象に—」『外国語教育研究』8, 38-53.
- Flick, U. (2000) Episodic Interviewing. In M. W. Bauer & G. Gaskell (ed.), *Qualitative Researching with Text, Image and Sound. A Practical Handbook*, London: Sage, 74-93.
- Schunk, D. H., Pintrich, P. R. & Meece, J. L. (2008) *Motivation in Education. Theory, Research, and Applications*, Third Edition. Upper Saddle River: Pearson Education.
- Ushioda, E. (2001) Language learning at univeristy: Exploring the role of motivational thinking. In Dörnyei, Z & Schmidt, R. (ed.) *Motivation and Second Language Acquisition. Technical Report #23*, Honolulu: Second Language Teaching & Curriculum Center, University of Hawai'i, 93-125.
- Flick, U (2002) *Qualitative Sozialforschung. Eine Einführung*, Hamburg: Rohwohlt.
- Web サイト: 国際交流基金 <http://www.jpff.go.jp/>